

閨妻學 全

鼻下長老校閱
みづ屋主人著

明治廿一年
子春刊行
文欽堂發兌

閨妻學全

鼻下長老校閱
女の屋主主人著

明治廿一年
子春刊行
文欽堂發兌

049.1Y612R

閨妻學叙

遠近の梅花の音信に心忙しく机頭に臂の落看ぬ折
 から又もや多廻家の許より閨妻學と題する原稿を
 贈り來りて曰く曩に先生の加筆を乞ひて世に公に
 せし狐政學政痴學の二書ともに天晴功名を那須の
 與市が扇の的要外さぬ命中に毘子の兎の乗がきて
 今一番月の桂を折ばやと思案も浅き水莖の向ふが
 まに〜此書を著し侍りぬ仰ぎ願くば是正のうへ
 叙文してよと懇到の囑托なれば無解に謝絶もでき
 ず花に心を奥二階で寐轉まんま讀過し任他よ三度



336872

笠横斜に被り旅の耻の書棄も時に取ての一興と喝
采七分に面倒三分合せて十分朱筆をいれねど藪黄
鳥の訛語なく陽氣に嘲る言の葉に浮され報保険強
の友音を副て早々返稿すと云爾

戊子の春浪華南采樓に於て

滅法會鼻下長老

閨妻學

總論

閨妻は經濟なり經濟は閨妻なり傾城は不閨妻なり不閨妻
は不經濟なり松島の一時間も十錢に下らす新堀の互弄寐
も二十錢では費束なく去ど二十錢で半紙を買へば如何な
豪傑も四十日では潰切まじ四十日の御用を一夜で辨する
と云ば大層便利だが百日の説法を屁一發で破ると思へば
願る陰氣ならん陰翳りて陽をり出サア三階へ五案内と
階子の戀の鈍く鈍と打出す鉄砲も相互でヨヤサのヨイ
腰轉ばぬ前の杖もなく前から外る、越中の揮子もせ

鼻下長老校閱
多の家主人著述

無分別ある時大盡後乞食金が敵の世の中とて尿の色
で黄金色垂るたびごとくペラと鳴り金貨と珍者とは小
便の音にして紙幣と銅貨とは下痢の響なり廊下の響
を聴て空厨を發する狸客あれば拍手の響を聴て銚子
を聴て豆扱あり振付られて野怪神と爲り食過の綿秘は犬越
と爲る甲越の戦場は川中島にして檀越の不平は大黒なり
西國は三十三番にして四國は八十八箇所なり大坂の遊廓
は六箇所にして與三郎の刀創は三十四箇所なり戀の意恨
の十人斬あり色の争論の鞘當筋あり當て喜ぶは回針の景
物にして當て怒るは破落戸の喧嘩なり上を下へと騒ぎ立
ち大鼓が鳴たら賑かた喇叭が鳴たら陽氣だね鉄道馬車安
價ね一區二錢だよ木統にろうなら安價もの乗たか四辻侍

て居な近へ来たな手をおげな娼婆さん避ぬと敷れるよ
生命が惜くば避てぬなオッペケッポポ五愉快先は向嶋
柳半か八百善かど浮起鴉の浮言も金の威光の金遊金を出
ねば木をやぬ村木娼の後にのり棹さす色の川ふかく散
布離はまれば首丈浮ぶ瀬もなき向水かはすよ柳を看て還
るが是れ閨妻の本意なれど意馬が狂へば閨妻を忘れ一文
借の百知らず高の知たる立引に鼻毛伸して内を外る行
き晝ゆき晩にゆき行ばかへらぬ雪達磨どけて嬉さ下紐に
又た縛らるゝ煩惱の犬かみ着れし極兒の足多の分離が
苦に爲て餘情れし鳥友千鳥飛立つ心の駒下駄も戀に黒結
の黒革皮足元くらめば家は閨家倉つふて夢が覺め是は
とばかり後悔の臍を紙衣の伊左衛門誰に恨憾を夕霧の怨

切ありげに言ひ掛る其口車に乗がきて肌皮の雪の上すべ
り落ては登れぬ奈落の底怨龍赤鬼に責め立たれ目から火
がいで尻に火がつき只だ焼酒の焼飲に飛だ不聞妻を爲す
とあり是れ聞妻の不平等は米櫃より狼が躍り出で焼餅から角
出るとあり噴嚏の焰天をこがし熱き涙の雨ふりて山も崩
る、ばかり雷鳴せるとあり是れ皆な恪鬼の仕業にして能
勞馬にたゝると甚太し故に古來勸請して山の神と稱せり
山の神の氏子多く一文不通の素寒貧にして聞妻と不聞
妻の判断に暗く家比行燈を消して島の意茶月に浮れ油代
を吝て揚代を吝り一升買の飯米に事かいで一夜妻の手管
に幻想をぬかし持りや紛蕩る振れりや怒る始終無益の空

騒を仕出かし綿福入質して鬪雞鍋喰て鬪雞くて鬪雞くて
眠れないとあり飯にならぬが浮世じやなど時計かぞへ
て居候を爲すとあり總じて迷へば聞妻に疎くなりて不聞
妻の事のみ思ひ親に苦勞させ其身も苦勞たゑす苦勞に苦
勞が増して眞黒くろ助稻荷に魅れて子まで産したる篠田
妻を敲き出すとあり親は敲きだせ子は絞殺せ後の始末は
妾がせるとは不聞妻の極にして主か貪すりや緞子の帯も
買て苦勞を縋子わいなどの聞妻の至なる聞妻に凝ば家道
が明白くなれども不聞妻に傾むけば方向が看す故に目先
をミル氏の經濟書子を思ふオーカ一氏の經濟書共に世に
名あり
ろも經濟の英語をエコノミーと云るは日本語のエイコン

即ち善撰と云ふ意にして容貌よりは心立を肝腎とする
となり閨妻の英語をワイフと云ふは日本語のワルイフ即
ち醜婦人と云ふ意にして美人よりは親切多きを示せる
なり凡ろ何の國何の世を論せず容色よき婦人は器量を鼻
にかけて男を尻に敷くの尻風あり鼻毛の長き突天漢は嫌
アに呑れて涎を流すの傾向あり其が爲め閨妻の乱るゝと
儘あり内の事なれば寧ろ最初より色が黒ても鼻が短ても
縮毛でも痘痕面でも柔順くって貞操の正しき者を見立て賤
が伏屋の荒世帯飯も焚ます糸車まはれば四國は讚州象頭
山金比羅大權現にあまで婢大明神の行罰をうけぬやふ閨
妻學の奧義を究めざる可らず閨妻學の奧義を究むれば香
に迷ふ梅が軒端の匂鳥の聲に似たるホーセットの閨妻書も

何かはなさん木村重成は閨妻の書遺に依て勇をろへ古手
屋入郎平は閨妻の遺言を聽て腰をぬかト渡邊渡の閨妻は
遠藤武者の刃を受てけさの露とさへ早野勘平の閨妻は身
を川竹に沈めて金をかゝる歌方姫を見て意恨をかゝるは
與右衛門の閨妻にして我子に見當らでうろくあのみ歸
るは十郎兵衛の閨妻なり傾城買の閨妻ハ糠汁絞り
客畜奴の閨妻は柿の核を舐る柴薪を戴くは矢瀬小原の閨
妻にして井戸側會議を開くは裏長屋の閨妻なり役者に肩
入して亭主を五月蠅がるは閨妻にして閨妻にあらを不閨
妻の信實立は矢張不閨妻なり不閨妻を遠けされば閨妻治
まらず閨妻を守れば其家富榮へて子寶を得ると多かりな
ん松王曰く持つへさものは子なるぞやと亦た閨妻學を知

る者といふべし
 去と聞妻を守らば先づ不聞妻の事を知らざる可
 す不聞妻の事を知らば持ると振るの原因を知らさ
 る可らず故に其原因を雑と摘で左に説明をべし
 夫れ天は屁の如く地は尿の如し造物者宇宙の踏板に跨り
 一たひ氣張ば屁と爲り二たひ氣張ば尿と爲り屁浮で空氣
 と爲り尿積で山と爲り尿溜りて海と爲れり故に人は蛆虫
 にして終身尿壺を離るゝと能はを婚禮を臭元と云ひ女夫
 を糞附と云ひ吐壺入と云ひ汚屁羅尿と云ふも皆な是より
 起りしとなん去バ昔は女房を尿放と書き鐙を夢壺と書き
 一が星移り物代り萬事面目を改むると共に言語も文字も
 變化したるものなるべし併し古來未だ面目を改めざるは

傾城の手腕と能弄馬の鼻毛にして此二物が合体して不聞
 妻の原因と爲るものなりと云ふ又た傾城の正体は狐に
 て長き尾あり騙さんとするときは尾をたれて自由に握ら
 しめ萬く見込のないとさには尾を掉て撲くとあり故に尾持
 尾振と云へり
 耶蘇教徒は神が七日間に天地萬物を造りしとて物知顔に
 説立れども傾城の七變化て正しく七曜の基にして之を
 氣天鏡に照せどきは陸と信の正体を現はせと奇妙なり去
 ば世の學者達は七曜日と云で七妖術と稱せりも七の貴
 きとは天神の七代と爲り聖人の七竅と爲り一月七日の七
 草と爲り七月七日の七夕と爲る神に七福神あり禽に七面
 鳥あり七堂伽藍は佛者の誇る所にして七度焼の陶器は貧

七人の珍重するものなり戀ゆへ火刑となりしは八百屋お
七にして女に蟹を復れしは滋賀團七なり七力瀉哇力ンヤ
七の毛と唱ふ子守あれば七本目には姫子松と謳ふ小娘あ
り七郎爲朝は琉球へ入て武勇を顯はし悪七兵衛は日向島
に流されて餘生を送れり七十の手習七寸の鞋七味唐辛子
七子の羽織北陸道は七ヶ國にして伊豆に七嶋あり四十七
士の中に館林唯七あり七段目の茶屋場にお輕の愁嘆あり
七の德利七賢人の瓢七轉八起と云ば貧乏も苦にならぬ
七の七儲の八費ときては頭の上ると無らん七屋の捨利に
追立られては先考の七年忌さへ訪ふと叶はず七日の不淨
七里が濱の漁業賤が岳の七本槍辨慶の七道具愛國の烈士
に二七回猛士あり腰抜の親玉に大館七郎左衛門あり西

國の七番は岡寺にして四國の七番は安樂寺なり助七兄弟
は平井權八に殺され伊井大老は水戸の七士に斬らる文七
の髻結半七の飯毛京の七條七代高尾加賀の千代は十七文
字に依て名を擧げ女郎の果は七置婆となりて苦勞すると
あらん其他安藝の宮嶋廻れば七里浦は七浦七夷子まで書
立ると七面何なるがゆへ只だ七景は霧に隠れて三井の鐘
と云ひ包めやと任せの七平とナと平作の千鳥足を踏止め
木の根に跌かぬうち總論の幕を引き七妖術の講釋は本論
に入て待出すべし
痴税とは鼻毛及び垂涎に課る痴呆税の事にて其徴收期限
は大約紋日月の前月なりとす此月は何でも個でも娼納せ

んと一生懸命氣張るが故に弓張月と云へり若し期限を過
て娼納せざるどきは妓則に據りて身代限にあらで心慮見
限を申し渡さる身底見限にあら者ハ二度と再び其樓へ行
き悪きにより頭をかへて後悔せると限りなく故に公賣
否な後悔處分とも云ふ
痴税の額は鼻毛と垂涎の長短によりて不同ありと雖も其
割合ハ鼻下百分の四十九勞なりと云故に痴税の根帳を鼻
下三錢帳と唱へ漏らす記載せり但し痴税を受取る際には
鼻先で喜ぶと雖も陰へ廻りてペロと舌吐し毛頭感謝がる
心無きが故に俗に無心金と云へり寔に閨妻の本意に違ふ
と太甚し
然るに後悔處分にかゝるを恐れ無生に無心金を出たがる

ものは何ぞや是なん七曜日否な七妖術の性質を合点せざ
るが故なるべしそも七妖とは日月火水木金土の七種にし
て傾城の心術は悉く此中に籠れり日は術なり又た秘なり
外見に知ぬ秘術を施して無生に陽鴉を第一とを即ち俗に
手管と云ふ的なり月は決なり又た擣なり諸事陸を擣くが
ゆへ決して的にならす若しウカと騙さるゝときは忽ち決
まづいて孫擣と爲るなり火は貨なり化なり又た非なり變
化自在の手段をもて貨幣を貪ると殆ど人非人とも云ふべ
きか故に狐の名あり水は粹なり又と不眷なり化されては
方向不眷となり貨幣を湯水の如くに遣ひ馬鹿に粹人ぶる
なり木は目なり又た氣なり貼目のほしさに氣のある如く
見せ掛ると知ずして目氣の幸福と心得矢鱈に浮氣たち始

終目的の外、鈍痴なり金は金なり其色黄なり傾城の
爲に金の入用多く何個につけて黄金の絶るとなり土は怒
なり又た槌なり散ふ驢した上で槌の如く振付られ憤怒す
ると限り無し此時疫鬼と爲て聲を發するが故に怒槌と云
ふ怒槌の聲をきく者は餘りの笑止さにお臍の宿違を爲そ
とあり依て雷に臍をとらるゝと云ふ諺あり又た山の神が
此聲をきくときは怒鳴ると甚太しきがゆへ神鳴とも云へ
り物の理に暗き者は雷を霹靂と云ども是は訛言にて實は
歴々の落たるものなり故に虎の皮にあらで能樂の皮の揮
子をしめ間をうつに巧みなる者多し雷の病を雷病と唱
へ終身全癒るとなく性根玉腐れ果て陸に在ては地雷火と
爲り水に入てを水雷火と爲り盜賊に地雷也あり屋根に避

雷柱あり雷と爲て時平を撲ちしは菅相亟にして家雷をつ
れて酒頓童子を退治たるは雷光なり儒者で名高きは雷山
陽にして滑稽で聞へたるは風雷散人なり乞食は蒙雷の多
きを喜び情死は未雷の世を樂む蓬雷州へ渡りて不死の藥
を求めんとする馬鹿あれば愧雷子を看て憂を晴す氣樂あり
り雷鳴の空へ紙鳶を揚けたるはフランソクンにして雷獸
を撃殺したるは雷電爲右衛門なりエスオーライは赤鬚の
囂言にして藝妓の應雷は鼻毛の願なり否な客を鬼雷と云
へば雷年の事を云ば鬼が笑ふと云ひ痛雷動といひ越雷仕
事と云ふろこで怠者を雷惰生と云ひ破落戸を無雷漢と云
ふ是れ皆な痴税娼納者の零落なるべし
傾城が痴税を徴收せんとするときはイナづらく其

由を書き送るを常式とす之を無心多と云ふ故に閨妻は多

附た仕方なりとて憤怒るとあり其書式は左の如し

此四漁日は打絶て、おん顔を水、後渡らせ玉ふにやど、思に

たねかぬ、一舟網しあげり、いよ、おん川原瀬なく、魚

座遊ばされいは、おん雲丹くぞんじあげり、今鯨申

上るまでもなくい鱈ども、鳥賊なる因縁にや、只管鯉小鯨

あめにつけ沙魚につけ、思ひ鱈穂の花鱈、ぐちは次第に鱈

鱈、さよりなき身を飽とお干めし、變らぬれ菜鮭にあづか

り度、貝かけ鯨じあげり、鱈くおんはねし申上おさひ、天

神祭も、間近く鮎なり、鱈は、ろれく用意を鱈にて、吳鱈屋

も三三日の内、に、まいる鱈にいま、鱈とぞ鱈とぞ、明晩は

鱈くおんいだ被下度、鱈く根貝あげり、おん鱈し申上鱈

事は、山くにいへとも、何も鱈、鱈のれ目もじよづり、鱈さ

らに鱈もらしり、骨肉く目出鱈

第二章 猪口税及び烟税を論ず

眞劔の経済學にある直税問税と本章の猪口税烟税とは丸

切別物にして蟻蝮の罌丸と狸の罌丸どころの相違にあら

ず烟税は烟徳利の内より起る焼酒の痛瘰税なり故に痛税

とも書く即ち呑飲滴鉢を碎ぎ三味線を毀した時若くは夜

若へ無念尿をした時などに課せらる、狂毀費なり故に

痛氣は損毀と云ふとあり又た一説には痛氣は村費なるが

故に痛税を出さ者は野暮な百姓に限るとも云へり

去バ羽織かくせば痛瘰あてす否で羽織が隠されよかど云

ひ瘰を押し其手を押し主が浮氣で此病と云ふが如き場

合に於ては此税を課するとなると雖も腎助の煙草益を
くたゝいて癩瘰の虫を起し烟徳利へ小便を垂込で癩瘰
を爲すが如きは尤も酷税を課せらるゝものなり姦よく能を
きめて鉄漿壺へ落こちるを鈍馬漢と云ひ西洋秤をカンカ
ンと云ふ甘蔗は薩摩芋にして監獄は牢屋なり芝居に勘定
場あり戸口に勸化札あり寒天製の羊羹は價が安く漢學者
の貫むは左國史漢なり堪忍のなる堪忍は誰もすれども少
年の勝間をくわりしを寔に韓信なり勘助入道は軍略の才
幹にたけ漢の高祖は關門の危殆を脱かるカントの學派は
今に存れどもプラト一の勸念は全く廢れたり關東關西は
箱根の關が境界と爲り疳疔下痢は横根の毒が煤助と爲る
とあり弱身につけてむは傷寒坊にしてたゝく鼻たらず

は感胃なり小兒の煩ふは痺瘡にして胴樂のやまぬは素寒
貧なり蜜柑金柑は小兒の泣を止むへく無臭肝油は肺
の病を治せべし勘定不足の立引に魂を奪はるゝ自惚奴あ
り手管の奸計にかゝりて吐紅舌をせらるゝ野暮天あり鍛
治の音は突天漢と聞ゆれども馬鹿の遊は鈍珍漢なり今度
此度長崎演習について數多士官のある中で私の好きなは只
一人と唱ふ痴客あればチヨイと一抔管相丞爛が熱くば梅
王丸酔たれ顔は櫻丸と唱ふ藝妓あり漢宮阿房の樂事も只
た郡邸の一夢にして果は勘當の身と爲て艱難をるとあり
故に癩瘰は諫税にして懲て閨妻を守ると肝腎ならん
とは諫議大夫が諫言なり去ば不閨妻の甘言に迷はされて
魂を抜すとはね諫制と云るが訛傳て爛税と云ふに至り

しどなん 猪口税は一りに酌税と云ひ縹子の帯役所へ納むるものにして其額は大約二十錢以上五圓迄なりと云ふ昔は五圓に足ないものは何歟の五圓がなかりしが近來は貨幣の價位が狂へるものにや二圓にても矢張五圓があると思ふ者あり帯役所が猪口税を得るときはホチ／＼笑ふが故に従前は放痴と唱へしが何の頃よりか訛變てホチと稱するに至れり俗に鼻下町の軒別にかゝる壺數割なりと云へども實は肩引よかゝる呼吸悪なりと云ふ去と此税を納むる者は減法持がよく自由に拳幕が張れ素敵に拳式がさくをもて又た拳銃とも云ひ拳星とも云へり拳星とは牽牛星の事にし

を興へたり亦た珍説と云ふへし

牽流星俗に拳流星と書く杯子の選といこふりて順ならさる時酌女に對して聲を發せ一より十の度數をもつて勝負を争ふ故に以左加比星ともいふ織女は酌女にして拳流に對して杯子をせ、め衆星を宴つふさんと計る也へに宴女(即ち織媛)ともいへり拳流が酌女にあへる河を呑河と名けて其流れ鉢水の如く又た酒の如し故にさ、を流すと云ふとあり鶉のはいと云ふ説あり鶉は文字奔差宜にして象椀の如し席の酬にいで、飛めぐるなり此鳥有頂天に昇つて梯とある故に傘差宜の梯と云へり

第三章 時間を論ず

西洋の諺に時間は金なりと云ふとあり又た途方士哲學者

は時間と空間の差別を立たりては閨妻上肝腎の事なる
ゆへ十分附會ざる可らずと雖も之を附會するには先づ午
午後の區別より次第を逐て説き起さへからざるによ
乃ち左に陰陽の別より端緒を披くべし
凡る世間の事物みな陰陽あり手を翻へせば陽と爲り手を
垂れば陰と爲り撥けば陽と爲り口を開き哀めば陰と爲り
齒を咬む小便は陽なるがゆへに前から出で尿は陰なるに
より後かゝらぬ出づ且的は陽なるをもて表から入り間夫は陰
なるにより裏から忍ぶ此筋合を推すときは前と表は渾て
陽にして後と裏は皆な陰なり去ば午前といひ午後と言ふ
も亦た一日中の陰陽を別てるものにして午前は陽にて午
後は陰なりと知るべし

伊勢音度に云く馬が物いふてロイと馬が物いふとは
ヒソ／＼叫ぶとなるべし而してヒソは貧なり即ち皆無垢
物のなきとなり総じて物は無より有となるが故に無は有
の始初なり去バ馬を時始と一猶其無の由縁を表すため
正午を零時と稱せり零時より前後に分ちて陰陽を明示せ
しなり但し馬を午と書くは只た午馬かゝりに止るがゆへ
字に拘はりて馬午づくに及ぶべからず
借て一日晝夜あるは持ると振るゝの區別に依り起りし
ものにして持たるときは無生に浮立て理非が分らず故に
夜なり振れたときは自惚熱も醒て傾城の正体を看定むる
とを得故に晝なり去ば夜の一時は一夜月の一にして二時
は二世の二なり三時は鼻下三寸の三にして四時は四情器

の四なり五時は五苦道の五にして六時は六で無しの六なり七時以後は晝の部に於て振れた揚句に七屋行を爲し泣面に八の如く諸事九勞の種と爲り始十一盃の酒に依り元氣を著るなり偕て午後一の時よりは一登樓を思ひ切る氣になり振た女郎が面二く、三財の馬鹿な事を覺ては四遊に出るも面白からず五常の道を踏で六根清淨の本意を透んと欲するに至る去ど七時から先は復た戀の暗と爲り七夕の逢瀬を思ひ出ては坊頭の八巻の如く締着なしと爲り寢屋の九説に十分鼻毛をよまれ長の夜十一心不乱に行末の事を語り深く迷ふては十二午刻まで身代を破らざるとなし故に時間を撰びて閨妻を守らざる可らずとて五勺の酒に歐羅巴人は無生に閨妻を重ざるなり

原來時間は侍間にして傾城が侍るとを云ふ傾城は情を露き色を賣る者なるが故に之をして侍らしめんには必らず金を出さる可らず依て侍間は金と稱するなり去と金を拂ひながら臂鉄砲の置土産を賣ひ枕かたしき獨身寐に膝小僧を抱て根氣の月を看るとあり根氣の月の出るときは毎も傾城は空蟬の去て影なき空牀なるにより空間と云ひ一なり空間は誰しも好ましからねど侍間の猥みは又た別段の事なるべし去ば西洋人が侍間を大切にするも亦た甚助の煙草益より出龍見ならんか其は兎に角も侍間が金の不閨妻に迷ひ判断の理を誤るものは竟に時刻の移るを忘れ夜明て後ち猶痴話狂に恍氣を振すものあり故に時刻の遅るゝを痴刻と云ふなむんりも明六時の鐘は野郎の未

二時を擲き起し名残おしさに九時ふくむれば十時と爲て玉
を擲さゝるゝとあらん一番雞の鳴き始るは正二時にして
二時の頃に牛の時参する悪女あり時政の女に時姫あり時
頼の行脚は時人の疾苦を察せり六時の經文は釋迦の骨身
なれど一時の憤怒に身を亡すものあり阿部の頼時は前三
年の役に滅び五郎時宗は富士の巻狩に復讐せり時の流行
多くは西洋をまね候の不順は病氣の媒因と爲る芝居好
の老人概ね時代物を貴び大坂時問毎も時機を失ふ時利あ
らず驪也かすとは項羽の嘆辭にして天の時地地利に如
すとは孟子の格言なり太平に處して戰時を忘れず干渉に
あへども時政を論せず碁棋に凝て飯時を忘るゝものあり
愛妾に放心て登應時を怠るものあり時を得顔に咲出る花

あれば時に遅れて洞む草あり時來れば龍と爲り時を得さ
れば嶮と爲る時借に義理を欠ば入用時の差支と爲り一時
捌に遣ひ果せは金の乏時に不自由をきたさん留連日を累
ぬる時は家の闕が高くなり附馬に迫らるゝ時は口譯の聲
が低くなる酔ふ時は剛氣なれども醒る時は心氣なり時く
の親切も金が本なれば鏝一なりと爲る時は色男も色を失
ふべし去ば暮六時は戀の夜に入初更なるが故に金が鳴
り明六時は眞地目の晝となる發端なるにより金をつく金
ある時は好るゝと請合にして金なき時は嫌るゝと相違な
し好るゝと嫌るゝの順序を晝夜の時刻に見立れば概ね左
の如し亦た當えずとも遠からさるとならん
夜の部前に述べたる如く好るゝときは方向が見ぬゆへ

夜は好る方に属す
 六時 金 七時 快費家
 八時 深切 九時 好男子
 十時 風流 十一時 頤智
 十二時 巧言 一時 遊藝
 二時 陽氣 三時 博通
 四時 無邪氣 五時 重諾
 斯く好る、方は金が根元となりて重一諾に終る重一諾
 ければ樂み多きがゆへ手管の奥義をつくして甘く騙さ
 んどす是れ嫌る、となき由縁なり
 畫の部 是れ亦た前に述たる如く嫌る、方には属するなり
 明白になるゆへ畫は嫌る、方に属するなり

六時 貧 七時 齒垢
 八時 鹽垂 九時 生意氣
 十時 無情 十一時 無藝
 十二時 嘲辯 一時 鼻吝
 二時 惡戯 三時 腎助
 四時 自惚 五時 馬鹿
 斯く嫌る、方は貧が起因にて齒垢が目にしたち竟に馬鹿
 にされて箒子客と爲り終るなり故に嫌れし者を素寒貧
 と云へり
 右の次第を看れば好るも恍らる、も皆な金に起因くと明
 白ならん去ば如何に容貌が好くとも金なきときはお問な
 り又た金與ての深切は心から喜べども深切ばかりでは迎

も一圓の金ほど悦ふとある可らず地獄の沙汰も金次第傾
城の信は金にあり梅が枝は手水鉢をたいて金を耐り忠
兵衛は爲替の金をもて梅川を身受し稻川の金につまりて
鉄が嶽に頭をさげ由兵衛の金にかつて長吉を殺し金で
拉で高尾の身受をなしたるは仙臺侯にして金を擲ちて官
爵を買たるは雁門の太守なり洋行して學位を金で得たる
書生あり金に迷ふて試験の問題をもらしたる徳張ありオ
ーイく老父殿其金此方へ渡してお呉といふ定九郎あれ
ば七時の金の鳴までは私かみやせぬと云ふ耐忍家あり七
歳八歳から金山へ一年立どもまだ見ぬは千松にして私も
此頃出世して大金持に成駒屋は小間物賣の助さんなり金
のなる木を持有なざるまいとはお安が主水への異見にし

て金にあかして購たる櫛を折れて泣出すは主税の娘なり
折節風にさうはれて間近く聞ゆる金太鼓亂調に打立つる
は忠度の追手にしてお前は親切私つとめ金ができたら復
たお出とは傾城の魂膽なり金の中でも嫌ひなものはおね
く氣金に明の金なれども釘抜は股に挟みて金をとるを
仕事とせり去ば一にも金二にも金三千世界只だ是れ金な
るがや侍間は金なりと云しも萬事を金たる金言と云ふ
べ！依て返金の言譯多を左に録す
金て灼銅いたし鑄候金子の儀最早片碎の期銀を相過候
につぎ滅金砂金都合仕候得とも今以て手廻り鍛冶候ま
銅貨て少々五圓期相願度實に此頃は紙幣もやうも
無之途法土鐵に暮れ居候仕合小生の眞鍮五推札の上右

第四章 赤鬼を論ず

赤鬼は節季に横行する鬼にして怒憤る顔色恰も朱をろ、
けるが如し故に此名あり此鬼の來るときは貧乏神の恐縮
ると羊の虎に遇るが如し羊虎遭ふ出と埃撥するとは是より
始まりしとなん又た其足至て重く一たび來れば容易に動
かざるを犀牛の如くなるに依り赤鬼はく犀の足と云ふと
あり其外赤鬼立ちると云ひ赤鬼込と云ひ赤鬼前と云ひ赤鬼
切と云ふコソ、咽の鳴るは風邪の赤鬼にして清少納言の許さしと詠みしは逢坂の赤鬼なり太陽の直下に當る處を赤鬼道と云ひ泥坊の親玉を盜赤鬼と云ふ赤鬼の小万は難なく逸馬をどらへたれど赤鬼痢の流行は竹巷にて防

難し赤鬼角あひは逢ひながら無情嵐に吹き分けられど
は朝顔の嘆語にして赤鬼心はいたは僕が失とは青書生の
後悔なり赤鬼の三本松一本斬や二本あどは斬れぬ女夫松
なれども赤鬼日の怨恨おもひ知と斬りかゝりたるは塞勝
五郎なり相撲に大赤鬼あり草に赤鬼竹あり赤鬼壘の金魚
は餌にあいて遊び赤鬼炭の煙は風に吹れて飛ぶ赤鬼繩誤
り結ぶ悪因縁とはお半長右衛門なるべく赤鬼塔にある戒
名の數も限もなむあみだ願以此功德平等の回向に餘念な
きは石屋の弥陀なるべし昔は箱根の赤鬼が嚴重なりし
が今は戸赤鬼の調査が綿密なり赤鬼十字社に入て慈善を
講ずる軍人あれば赤鬼盤挾て學校へ通ふ小供あり上役の
裁判官を上赤鬼判事と云ひ長州で一番の埠頭を赤馬が赤

鬼と云ふ紡赤鬼會社の職工には女人多く會赤鬼料理の客
 人には田舎漢少し人寄赤鬼へ行て眠る鈍馬あれバ店で赤
 鬼絶られて哀む馬鹿あり必竟斯く赤鬼とめらるゝに至れ
 ば其家は必ず火の雨ふりて泰然尻を落つけると能はさる
 べし故に雨火とて居られぬと云ふ言あるなり
 ろも赤鬼は貧乏神に付添て離るゝとなく果は身を亡すに
 至るとあり故に心ある者は之を豫防すると虎刺の如く
 なれども不聞妻を行ふものは馬鹿に膽太くなり十露盤珠
 を思案外に弾き飛すにより因果的面にて竟に赤鬼の追立
 をくふに至るなり而して其豫防法といへば只だ聞妻を守
 るの一途にあれども不聞妻を行ふに至るの原因は種々あ
 るが也へ左に其二三を掲げて世の般鑑と爲すべし

第一は思案貝を喰ふにより眠くらみて損得の分を誤るに
 起る

思案貝貝俗に外ども云ふは尻無川の逢瀬に生ず其形状
 礫石に似たるにより小石とも云ふ内部に熱氣を含める
 が也へ熱と甚たし去と秋風の立つときは忽ち飽と化
 りて思の海水のそまぬ處へ沈むとあり又た一説には此
 貝秋風に吹るゝときは鶉と化りて戀草の中に深く忍ひ

第二は吸付草にさはりて手の指しびれ十露盤を弾く能は
 ざるに起る

吸付草は屏風の浦に産すると多し莖赤くし長く花開く
 ときは頻に烟を吐き香氣高し落花にのぞめばポツ

音のするとわり此草に近接く者は眠るが如く酔るが如

く何事も渾て忘るゝに至る故に忘草とも云へり

第三は黄金菊を咲さんか爲め前後を顧みざるに起るは

最も注意せべき事なり

黄金菊にハ大小種あり大なるものを大盡草と名く此

花従前は黄金色のみなりしが近來は文明風に當りて變

色し多くば青白くなれり但し瓣葩紙に似てペラく

るをもてペラ札木とも云ふ原來無比の名花なるが也

四季ともに咲きみだるゝときは春風の吹ざるとなく遊

里の男女は争ふて之を得んと欲し心になき陸を吐て語

阿ふと笑止にたぬがたし去バ花咲ふと云ふと是より始

れりと云ふさて此花紅樓へ満遍に散布くときは總花と

云ひ床の海にて散るときは床花と云ふ孰も重寶さるゝ

と限涯なきにより無生に咲さんとする者あり併しもと

く枯れ易く榮へ難き花也へ狂氣風に吹きあらせぬや

う心に心を加ると聞妻の本意なるべし若し枯るゝとき

は當惑石と化るとあり此石は理質粗くして密らんが也

へにツマラン石とも云ふ即ち儘の川向水の底ふかく沈

み再び浮ぶ瀬なき石なり故に可畏石とも云ふ

右の外猶ほ多くの原因あれども紙數に制限あるが也へ之

を漏し復た本論へ立戻りて赤鬼の辨を演ずべし

さて一概に赤鬼といへども其種類は固より多し米屋薪屋

家主等悉く赤鬼となるとあれども其本をたゞせば娼家よ

り起るものにして不聞妻の影響にあらざるとなし故に鬼

の本家は羅娼門なりと云へり按ずるに羅娼門の鬼を綱が
 斬しと云ふ俗説あれども是は眞赤な陸にして實は羅娼門
 の鬼に世渡の綱を切絶れたと云ふとなり故に渡絶の綱と
 呼ぶなり
 近來歐洲諸國に軍用鴉をかへるが如く赤鬼も亦た鳥を飼
 へり名けて掛鳥といふ此鳥の飛び廻るときは世間頗る物
 騒し別て不聞妻を極めたる人家へは掛鳥の集ると多し中
 にも遊里より來るものは一寸小意氣な雌鳥なれども至て
 悪鳥なるがやへ高く轉るときは忽ち聞妻の乱と爲る總し
 て掛鳥は聲高くして鳴くたび耳をつきぬくばかりなるが
 故に耳僂と云へり耳僂に迫らるゝ者は膝つく鼻つく孫
 つくと甚だしく只た溜息をつくゝ思ひ回らせば心つく

ほど馬鹿くさく我ながら愛素のつくと多かりなん仍て
 其情態を摘で言へば正に是れ

袖ぬらそ後悔涙の玉取あちて墓なき身の果は粹も不
 粹もおしなべて愚痴になるみの紺絞り濃は思案の外
 やへか

閨妻學終

明治廿一年五月十三日印刷竣功
全 廿一年五月十五日出版

定價金拾五錢

版權所有

發行者

大阪府下東區南久太郎町
四丁目三十三番地

安井兵助

著者

京都府下京第六組松ヶ枝町
四十四番戶寄留

安井常次郎

印刷者

大阪府下南區纒谷西ノ丁
九番地

梶原ハル

發賣所

大阪京町堀通羽子板橋北詰西へ入

同 南久太郎町四丁目

西京三條通寺町

同 寺町松原下ル

東京日本橋區本町二丁目

美濃岐阜靴屋町

藤井書藏店
武田福藏店
山中勘次郎店
內山改進堂
東山京支店
金港堂

安井文欽堂發兌書目

- 狐政學 鼻下長老校閱 酒落齋居著 小本全一册 定價金拾五錢
- 自由政痴學 鼻下長老校閱 文の屋主入著 小本全一册 定價金拾五錢
- 酒義 鼻下長老校閱 文の屋主入著 小本全一册 定價金拾五錢
- 閨妻學 鼻下長老校閱 文の屋主入著 小本全一册 定價金拾五錢
- 交際用文 兒島榮太良著 中本全一册 定價金五拾錢
- 新發明 實地經驗 同人著 中本全一册 定價金壹圓廿五錢
- 童子之寶 茶窩主人之著 小本全一册 定價金拾錢
- 奇藝 同人編 小本全一册 定價金拾錢
- 修身之教 同人編 小本全一册 定價金拾錢
- 改海上衝突豫防規則問答 附日本海路諸標便覽 中本全一册 定價金三拾錢
- 英和正則會話 恒松保太良編 袖珍本全一册 定價金四拾錢

かむばんや

諸先生揮毫

○色塗漆油 ○金銀箔

押○油畫 ○彫刻等

右製作總テ堅良ニシ

テ雅美壯觀ヲ旨トシ

久シキヲ經テ更ニ破

損ノ患ヒナキヲ保ス

伏テ願クハ四方ノ諸

彦幸ニ愛顧ヲ垂レ賜ハンコヲ



脇田房吉

大阪東區淡路町貳丁目四拾番地

● ロングマン習字本 一ヨリ五迄

五册正價金五錢宛

● ロングマン第一獨案内 林十治良合譯 堀口保太良附直譯

中本全一册定價金四拾錢

● 菊池三溪先生校閱 池田萱洲先生著述 天下無雙 文法獨案内

洋本全一册定價金五拾錢

● 高等簿記學校長和田昌良先生譯述 商用簿記學教科書

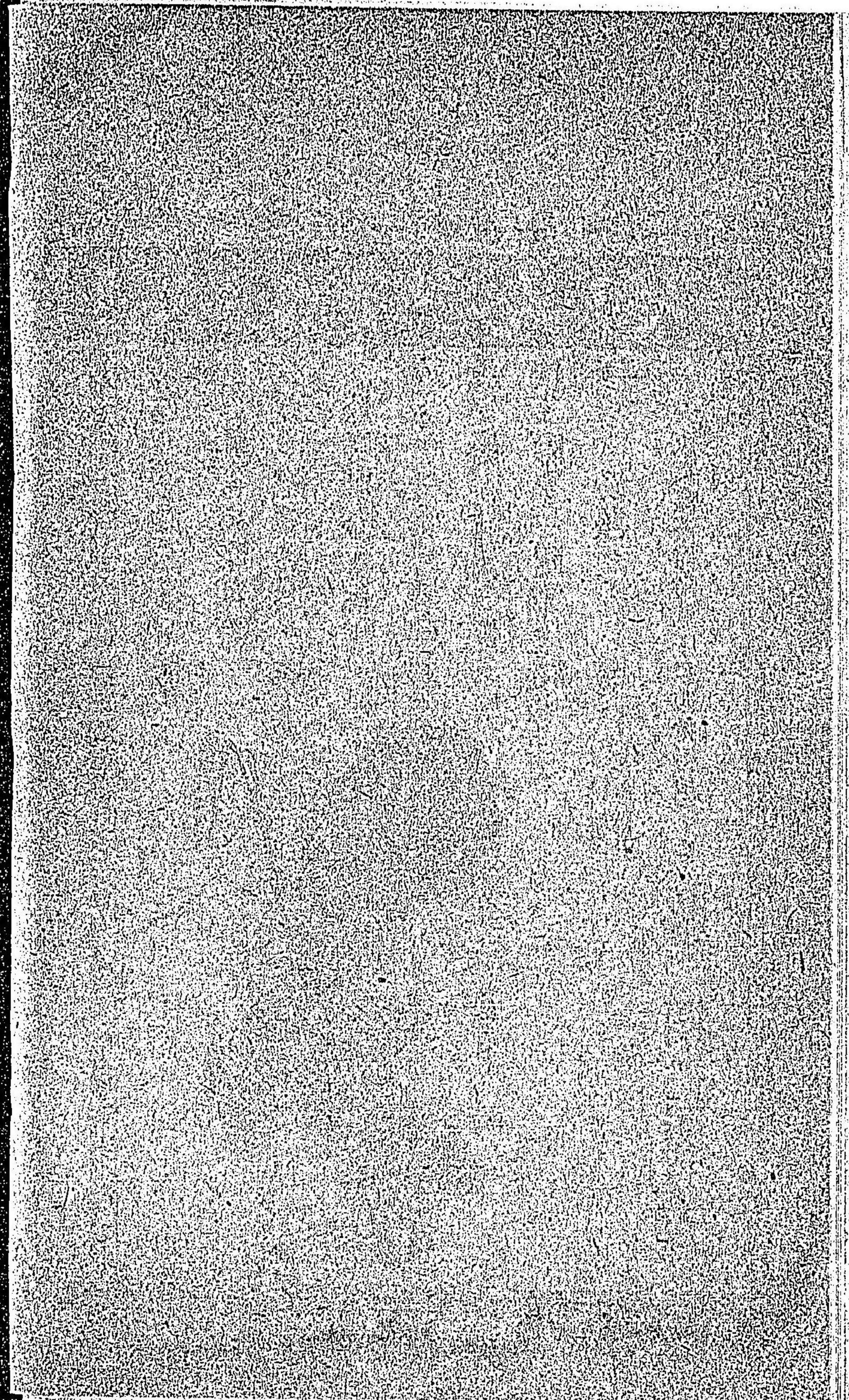
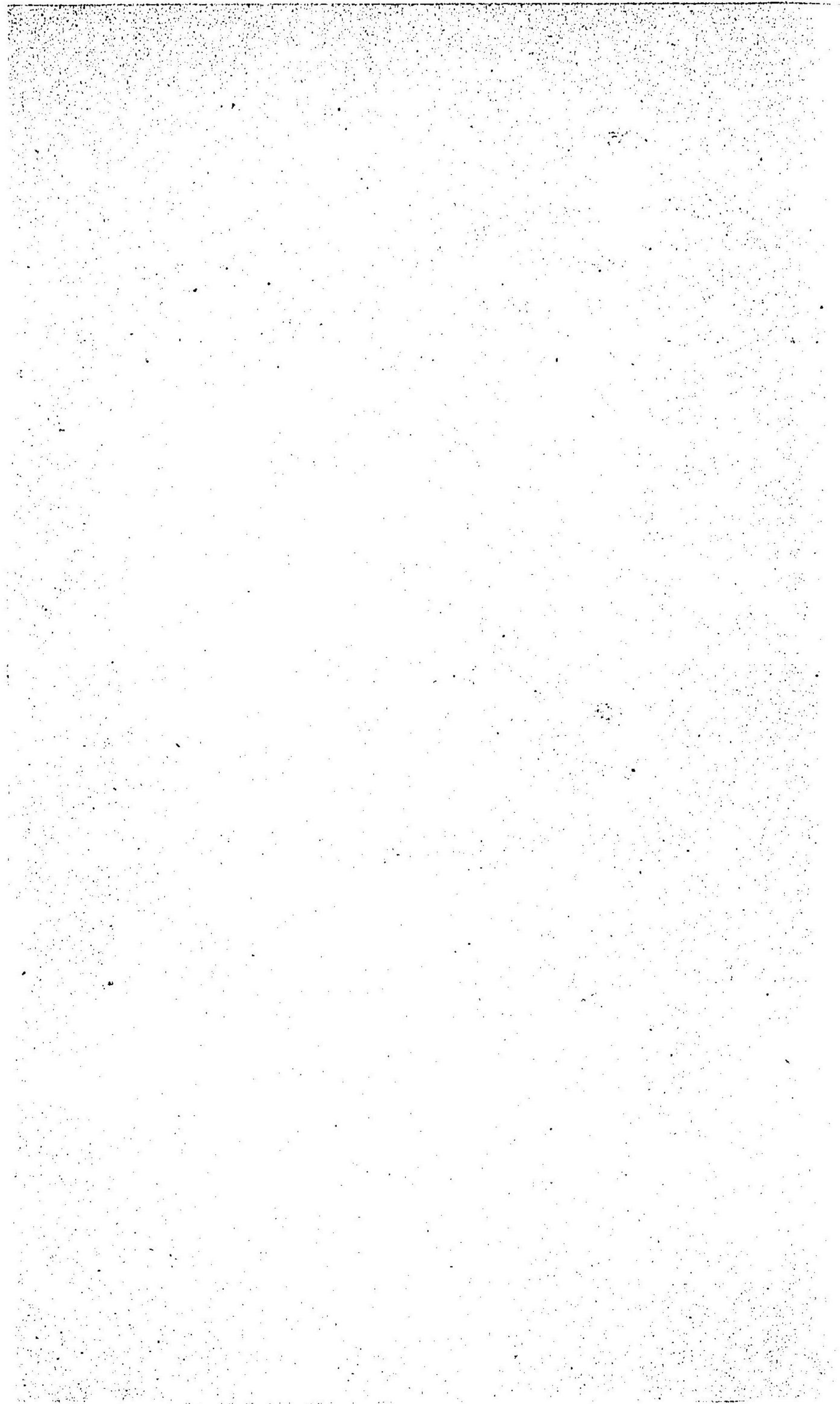
全三册 上定價金九十錢 中定價金七十五錢 下定價金一圓五十錢

● 陸軍歩兵少尉田宮一良校閱 陸軍歩兵軍曹體操教官牧元精雅著作 兵式體操指範 圖式共

全二册定價金三十錢

● 張滿居士著述 正議開胸滑稽演說

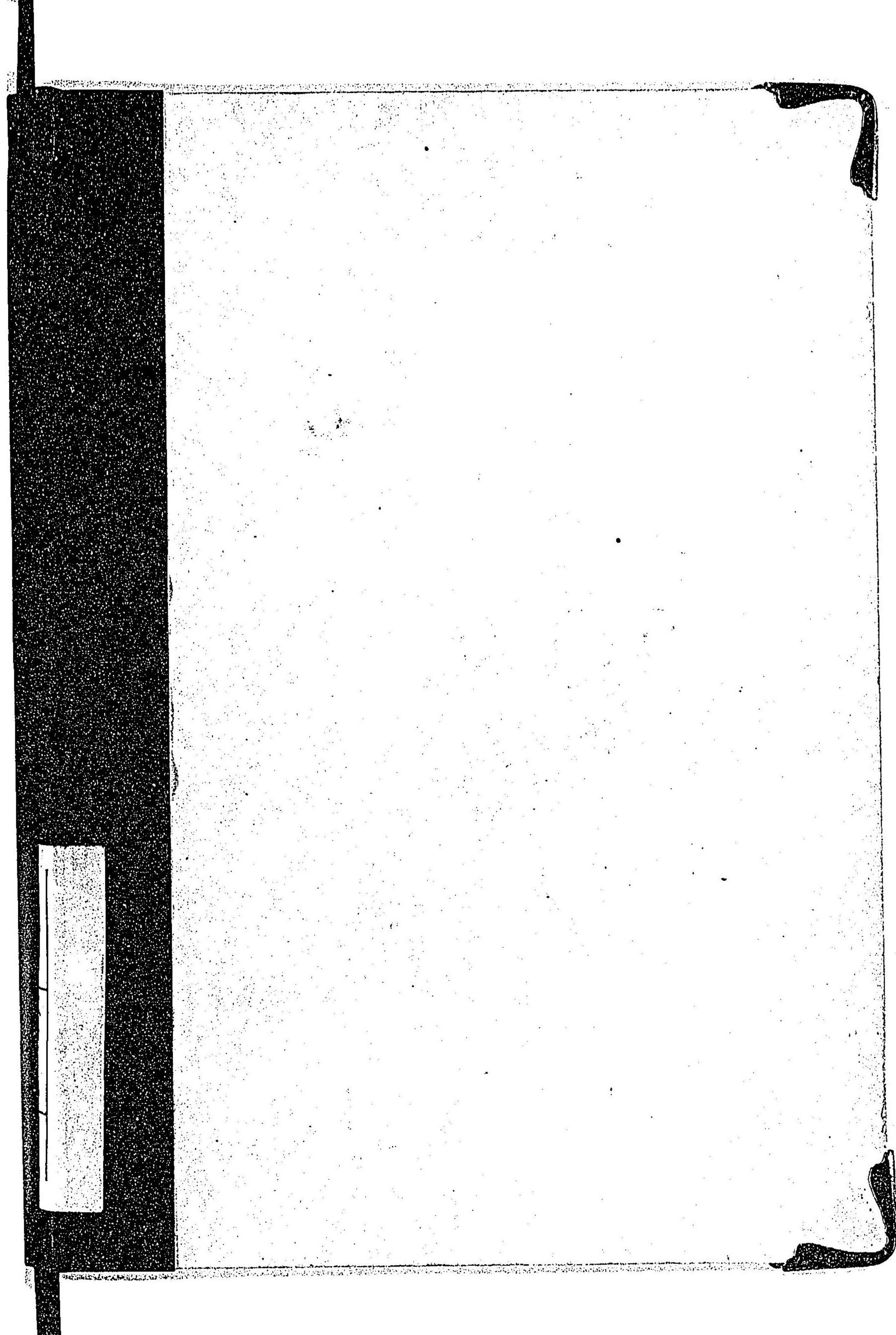
全一册定價金拾五錢



10

加
同
多





049.1

Y612k

閨妻学全

国立国会図書館

102292-000-1

049.1-Y612k

閨妻学

安井 常次郎/著

M21

EAG-0107

